

隠岐島の伝承歌謡について

李 建志

1. はじめに

隠岐道後にある五箇村¹は、昨今問題になっている「竹島」を抱える村であり、隠岐のもっとも北に位置している。もしも日本海を日韓の交流の場だととらえるのなら、この隠岐、就中五箇には、日韓交流の痕跡が残っている可能性があるだろう。もちろん、予断をもって研究することは慎まなければならないが、江戸時代前期には松江藩が鬱陵島²での漁を村上家などに許可しており、現実には操業していたことを考えると、隠岐が朝鮮と関係がないと考えの方が不自然ではないだろうか。

事実、五箇村には朝鮮語の単語が挿入された伝承歌謡が残っていたとされる。この伝承歌謡は「伊未自由来記」という書物に載せられたものだが、後述するようにこの本自体が偽書説が根強い³ため、あまり広く論じられることはなかった。そこで、今回はこの伝承歌謡を紹介し、それについて若干の考察を加えることとする。

2. 「伊未自由来記」の来歴

「はじめに」で紹介した「伊未自由来記」³は、現在『五箇村誌』に全文が載せられている。まずは、その内容について紹介しよう。この書物が世に現れたのは、1955（昭和30）年のこととされる。経緯は以下の通りだ。

本書は明治四三年一月初旬、私が島根県隠岐国穂地郡五箇村大字北方に存在し、同地に於ける五箇郵便局在勤中、知人なる同郡都万村大字那久に於ける家号新屋敷主人安部廉一老人の来訪を受け、同老より其親族たる都万村大字都万古木璉丸老人より借り出せるも

のなりとて、霊護庵所蔵と附記したる「億岐国風土記」又天和二年九月二〇日北方村神主藤田薩摩守清次記とある「穩座抜記」及び周吉郡中條村字上西に於ける酒造業長谷川家妻女に関する哀話を記せる「散紅葉」その他古劔等の展示ありたり。其砌右古書と共に、伊未自由來記なる筆写本あり、表紙に右標記の外永享辛亥三年（一四三一年）霜月持福寺隠居一閑記と記し 持福寺印 なる黒印あり。全文漢字の羅列にして読解困難なるも、安部老の説明によれば、前陳風土記の記事とも通じ、其確否は判定し得ざるも、参考とするに足と思考したり。

前記散紅葉を除く古書三部は、元來周吉郡中村佃屋事森一郎氏の所有のものなりしところ、漢學弟子たる古木氏に於て借受け、森氏逝後古木氏占有に帰し、霊護庵又は持福寺の所在地は不詳なりとの安部老の言なり。尚ほ老は帰村を急がるゝ故、不取敢局報電報の廃棄着信紙裏面に安部老の読解を、鉛筆を以て穩座抜記の一部、及び伊未自由來記を即記したのであるが、其後大正七年七月下旬大阪市へ移住、其後二七年間故郷の自宅倉庫に放置し、昭和二五年倉庫掃除の際に発見せるも、末尾三分一位脱落紛失せるも、一閑記原本の古色蒼然たりしを思ひ起こしつゝ、参考忘備にと茲に浄書し保存せんとするものなり。

昭和三〇年十一月下旬

六六歳翁

金坂亮 記す⁴

このように、金坂氏の言葉をそのまま信じたとして、明治末葉に安部廉一という老人が持ってきた三つの古文書とともに、この「伊未自由來記」が存在していたということになる。では、その「億岐国風土記」などの古文書はどこに行ったのだろうか。全く記述がないことから存在を確認することさえできない。さらに述べればこの安部老という人物自体が誰なのかもよくわからないのだ。またその安部老自身が「霊護庵又は持福寺の所在地は不詳なり」

といっているわけだから、はなはだ頼りない来歴で、偽書として闇に葬られてきたというのも理解できる⁵。

内容は、まず木の葉比等という隠岐に最初に住み着いた人間の話が述べられる。彼らは「衣服は下に獣皮の衣を着て、上に木の葉を塩水に浸して乾かしたものを」まどっていたという。後の伝説で「木の葉爺、木の葉婆」あるいは「箕爺、箕婆」と呼ばれる彼らは、船に乗り現在の五箇村にある伊後邑に住みついたという。彼らは農耕をしており、杵取歌や餅搗き歌、子守歌が残っている（後述）。そして、これら木の葉比等が「西方千里、加羅斯呂觸」また「韓之除羅國」から来たことされる。「此族は甘い団子を造ったが、此団子は後世まで役道の各邑にて造られ、杵取歌、子守歌として団子に関する歌詞が残った。此の歌詞は難解で主として邑長の家にのみ伝えられ、子守歌文は難解の俣今も歌われて居る」（「一、木の葉比等」）。

その後、「阿麻」という、全身に入れ墨をした人びとが到来し、漁業を営んだ。そして木の葉比等と同和雑婚し、木の葉比等は「風俗や言語も、阿麻人化してしまった」という。かくて阿麻人は隠岐全島に部落を形成し、「於左の神」が統治するようになる。この頃から隠岐は「小斯凝呂島」と称えていた（「二、阿麻」）。

しかし、阿麻人が定住して間もない頃、出雲の大山祇の神の族が来航し、阿麻人の於左の神が海賊に殺されると、「出雲の鞍山祇の大神の御子沖津久斯山祇神が来航して、小斯凝呂島の大神」となる。三つ子島（道前）が出雲の於漏知に奪われると、於母の島（道後）にも襲いかかってくるようになる。宇都斯山祇神の御代に至り、於漏知の襲撃から守るため、流宮の大海祇神の援助を受ける策をたてる（「三、山祇」）。

大海祇神は御子庵賀の大人様に多数の兵を率いさせて於母の島へ向かわせた。しかし「於漏知は強力で、遂に大人様の子孫が相次いで五代に亘る間対峙しつゝ、討伐」したが、百年あまりの歳月が過ぎた。六代目の大人様は出雲の「大山祇神の姫を娶り、神の援兵を得て於母の島の於漏知を完全に掃討」し、続いて三つ子の島も平定した（「四、大人様」）。

美豆別之主命は「天津神の御子にて多数の久米部・織部・工部・玉造部等

の民を率いて来島」し、「年三季に亙り全島を巡察し、各部民の業績、施療、道路船舶の改善を徳憑に勤められた。斯くて全島平穩に歸し、於漏知の侵略もなく、高志・丹波・竹野・出雲との航海も開け、就中主栖は之等の地と、韓との間に於ける往航最後の待機港、復航最初の給食給水の穩息港として栄えたのであった」（「五、美豆別之主命」）。

その後、「出雲に大戦が起こり、島と因縁の深かった大山祇神の勢力が衰退し、索いて島の政治も改革される運命となり、新たに奈賀の命が来航、島の治神」となった。島は大きく発展し、朝廷に認められていく（「六、奈賀の命」）。

そして、「誉田天皇、御間都比古伊呂弟命五世孫を億岐国造に定め給える。「此頃、外つ国の来襲盛んになり、国造は沿岸の防備を益々堅固に」したという（以後記事脱落、「七、十揆彦命」）。

一読して、まず文体が新しすぎることに違和感がある。カギ括弧でくくった部分は引用なのだが、ほとんど現代語であり、これを偽書でないというのはいささか勇気がいる。もちろん、『五箇村誌』では、神話というのは史実ではないのは当然であり、このような内容の「伊未自由来記」を「偽書説は取らない」と言明している。

この「伊未自由来記」をめぐる話で一番気になるのは、金坂氏はなぜ「億岐国風土記」ではなく、この「伊未自由来記」を速記したかである。「風土記」は現存するものがあり、やはり「偽造」しにくかったのではないだろうか。そういった意味では、金坂氏が残したこの「伊未自由来記」は、よくできたお話ではあるのだ。

さて、ではこんなものをなぜ取り上げるかという問題になるだろう。筆者は偽書であろうと考えている。少なくとも真書であるという心証は得られなかった。しかし、ここではもうひとつ別の視点から考えてみたい。ひとつだけ気にかかる部分があるのだ。それはこの文章に書かれている三つの伝承歌謡だ。

すでに述べたように、金坂氏の残したこの「伊未自由来記」は持福寺の印が押されているというものの、その持福寺も不明だ。そして、「億岐国風土記」を伝えていたはずの靈護庵も不明となっている。にもかかわらず、この三つ

の伝承歌謡に関しては出所が比較的しっかりしているのだ。

本文のあとに「追記」が書かれているのだが、ここには「木の葉比等」で紹介されている伝承歌謡の解釈を「周吉郡中村大字伊後清雲寺快順僧都」によって教示されたこと、そしてその翻訳が載せられている。要するに、この文章は「木の葉比等」＝「加羅」からやってきた人の紹介で始まり、そこで伝承歌謡があげられる。そして、木の葉比等が阿麻人に同化し、さらに隠岐全体が日本に編入されていく物語が展開される途中で話が切れ、「追記」と称して再びこの伝承歌謡が取り上げられるのである。ひとことでいって、これはこの伝承歌謡をめぐる話が、話全体の一種の枠構造をとっているのだ。しかも、この伝承歌謡を解釈する「清雲寺」という寺も五箇村伊後に実在し、「快順僧都」もたどることができる人物なのである。すなわち、この伝承歌謡の部分だけ他の部分とは全く違い、出典がはっきりしているのだ。

するところはいえまいか。金坂氏は五箇村の郵便局に勤めていた頃、この伝承歌謡に興味を持ち、五箇村内外の古老などに話を聞いて歩いていた。そして、快順僧都の解釈にふれ、難解とされるその歌が実は朝鮮語が混じっていたことに気づいたのではないか。だから、この伝承歌謡をもとに、ひとつのフィクションとして、「伊未自由来記」を作り上げていったのではないか。

「一、木の葉比等」の末尾にある「此族は甘い団子を造ったが、此団子は後世まで役道の各邑にて造られ、杵取歌、子守歌として団子に関する歌詞が残った。此の歌詞は難解で主として邑長の家のみ伝えられ、子守歌文は難解の俣今も歌われて居る」という記述も、このように解釈すると理解しやすい。すると、この伝承歌謡だけは、他の部分とは切り離しておく必要がある。

「伊未自由来記」の「追記」には次のような言葉が載っている。

安部廉一翁の指示により、五箇村大字代に於ける屋号八幡信太翁より、周吉郡中村大字伊後清雲寺快順僧都伝、杵取歌餅搗歌子守歌に付、教示を受けたるものを左に陳録し参考に資す、尤も此歌原歌に似たる様なるも、果たして原歌の直訳なりと断ずるにはあらず。

(中略)

大体以上の通りだと思うが、或いは多少間違ったところがあるかもしれない。此歌は中村方面に亘り各部落にあったが、文句が多少宛異なって居た様に思うが、此清雲寺歌が一番正しいと云伝えられて居た。杵取歌には臼の周囲を巡る舞もあつたが自分は知らない。木の葉団子は自分の宅でも明治二四、五年まで作り、材料は竹の実、栗実、椎実、葛粉、百合根、苺、麴、塩等各種混ぜ合せて搗いたものであつたが、分量は判らない。代議士時代に佐々友房氏に美味なりと賞められたことがあつた。

此木の葉団子が千年以上も古いものと同じであるかどうか自分は知らないが、村々の庄屋にて之を作つて神に供える慣習はあつたが、それも主として中村五箇辺のことであつたかと思う。以上が八幡老翁の話であつたことを追記して参考忘備とする。 (亮翁記)

明治時代に急速に廃れていった風俗のひとつとして、この五箇村の伝承歌謡があつたといえるだろう。そして、その歌と「木の葉団子」という食物が組になっていることも容易に想像が付く。おそらく金坂氏の「伊未自由來記」に登場する「木の葉比等」は、この「木の葉団子」から連想して想像されたものなのではないだろうか。やはり、「木の葉団子」を幼い日に口にしたことがある最後の世代に属するであろう金坂氏は、その伝承歌謡と「木の葉団子」の思い出を下敷きにして、「伊未自由來記」を創造したのだ。

以上のことから、この伝承歌謡については、千年以上前から伝わっていたわけではないとしても、ある程度古くから伝わっていた可能性は否定できない。そして、後に述べるように朝鮮語が混じっているそれらの歌が「韓との間に於ける往航最後の待機港、復航最初の給食給水の穩息港」を持つ五箇村で歌われてきたことは、ほぼ間違いないのではないだろうと類推する。以下に、その伝承歌謡をみていこう。

3. 伝承歌謡の内容と解釈

まずは三つの歌を紹介しよう。とはいえ、すでに歌われなくなったもので

あるため、「伊未自由来記」からの引用となる。

(一) 杵取歌

島のモクノシセイボン熟れた
ハイベントイペンソウベン拾うた
(牟羅にては「ハイベントイペンソウペイは拾うた」)
ハレパメこめてのもみプリホクに
ムリトントガチやドナベも焼いた
モクノシソメをサンにして
クドのシキリがヨシギあげりゃ
(牟羅にては「シリキをセイロまたヨシギを竈」)
杵爺やっこ白婆はい やっこはいややっこはい
タライシトギのつき始め あゝらめでたやめでたやな
(牟羅とは五箇村内にある地名一引用者注)

(二) 餅搗き歌

白婆は杵爺にこづかれだんつくだん
だんつくだんだん子が出来た
出来たその子がそれ団子
サンヤク葛タイママヤイ莓
椎栗団子にタライぞえ
トキカリひろげてキダリシャウ

(三) 子守歌

アチメ露分けて枝折りにナリ暮れりゃ
ネエリチヨンナリタアトさん
杵爺の許に宿かりて
木の葉団子を貰うて
チャアシャアアドリに負わして

枝折のサンコクケンチャアナ
ネンネの子よ団子の子
ホエリヤ杵爺が髭の中
ドングリズニを光らして
白い歯出して笑ふぞえ
ダンマテねんねんせえよ
此子は好い子だねんねんせ

歌詞中に登場する「杵爺」と「白婆」は、「伊未自由来記」では「木の葉比等」の呼称とされているが、この歌の中にあらわれる言葉から逆に木の葉比等を連想したのだろう。それはさておくとして、この歌の解釈を行ったのは、いまのところ「伊未自由来記」の「追記」に登場する快順僧都と、朴柄植氏の『スサノオの来た道』⁹だけだ。不幸なことに、前者は偽書説が根強く、また後者は実証性が薄く評価の低い民間学者の書物であるため、この伝承歌謡への注目度を高めるには至らなかった。

ここに快順と朴氏の解釈を掲載しよう。

快順訳

(一) 杵取歌

島の木の実が三たび熟れた
浜で大舟小舟は拾うた
一夜こめてのもみ火はホクに
大壺や土鍋も焼いた
木の実俵を山にして
クドのセイロが霧上げりゃ
杵爺やっこ白婆はい
やっこはいややっこはい
甘いシトギの搗き始め
あゝら目出度いや目出度いや

(二) 餅搗歌

白婆は杵爺にこづかれだんつくだん
だんつくだんだん子が出来た
出来たその子がそれ団子
芋葛竹マヽヤイ莓
椎栗団子に甘いぞえ
シトギ粉ひろげて
待ちよれ 待ちよれ

(三) 子守歌

朝露を分けて枝折に日が暮れりゃ
明日も天気じゃタアトさん (タアトは月)
杵爺の許に宿をかり
木の葉団子を貰うて
ねんねの子に負わして
枝折の山谷何ぞえな
ねんねの子よ団子の子
ほえりゃ杵爺が髭の中
どん栗目を光らして
白い歯出して笑ふぞえ
だんまでねんねんせえよ
此子はよい子だねんねんせ?

朴柄植訳

(一) 杵取歌

島の木の種 三度熟れた
海辺で大船小船 (原註：はつきりしない) 拾うた
一夜コメテノモミ (原註：くべた朶?) 火も赤赤と

水かめ、小かめや土鍋も焼いた
木の種三斗 山にして (山のようにして)
竈の蒸し器が蒸気をあげりゃ
杵爺やっこ白婆はい
やっこはい やっこはい
甘い蒸し餅のつき始め
あーらめでたやな めでたやな

(原註：ヨングはズングの誤りで<蒸気>のこと。隠岐では蒸気を
<モヤ>という)

(二) 餅つき歌

白婆は杵爺にこづかれ だんつくだんつくだん
だんつくだんだん だん子が出来た
山薬 (原註：山菜のこと?) 葛、タイママヤイ (?) 苺
椎栗団子に甘いぞえ
餅粉ひろげて お待ちなさい

(三) 子守歌

朝に露わけて枝折りに 日が暮れりゃ
明日はいい天気 お月は上る
杵爺のもとに宿かりて
木の葉団子を貰うて
よく寝る男の子に負わせて
枝折りの山谷 何でもない
ねんねの子よ 団子の子
ホエリヤ (原註：ポイリヤ=見せようか?) 杵爺が髭の中
雄牛のような目を光らして
白い歯だして笑うぞえ
だまって ねんねせえよ

この子はよい子だ ねんねせ⁸

以上のように、両者の訳文はかなり一致している。というより、朴氏は快順僧都の訳を参考に、上のような訳文を試みたのだろう。「この由来記の最後に、快順僧の歌が追記されていたんだよ。しかもそれが、僕の解釈と殆ど一致していたのには驚かされたね」という一文が朴氏の著書にあるのだが、これは快順訳を先に見ていたことを裏付ける。ただ、朴氏の解釈で進んでいるのは、単語の意味をきちんと拾ってその訳を付けていることだ。以下にそれを紹介しよう。

杵取歌	歌詞	韓国語らしき部分
	モクノシ	木の種
	セイボン	三度
	ハイベンソ	海辺で
	ハレパメ	一夜に
	プリホクニ	火が赤あかとなると
	ムリトン	水入れかめ
	トガジ	小さなかめ
	ドナベ	土鍋
	サン	山
	ソメ	三斗
	クド	火を焚く場所、又は、そのために作られた竈
	シリキ	蒸すための道具
	セイロ	上と同じ意味
	ヨンギ	煙
	タライ	甘い
	シトギ	蒸し餅

餅つき歌

サンヤク	山菜
トキカリ	餅粉
キダリシヤウ	お待ちなさい

子守歌

アチメ	朝に
ナリ	日が
ネエリ	明日
チョンナリ	良い日
タアトさん	月が上った
チャアシャア	良く寝る
アドリ	男の子 (息子)
サンコク	山谷
ケンチャアナ	間違いない (平気だ)
ドングリズニ	雄牛の目 (ドングリ目) 9

なるほど、朝鮮語の語彙に関してはかなり細かく拾われているようだ。ただ杵取歌の第二連「ハイベントイベンソウベン拾うた」などは「海辺 大舟 小舟 拾うた」だろうと考えられるため、概ね朴氏の解釈で正しいといえよう。

しかし、たとえば杵取歌の第三連にある「こめてのもみ」はほとんど意味不明で、快順僧都も朴氏も匙を投げているが、筆者としても「込めての朶」という意味だと想像するぐらいしかできない。また餅搗き歌の第四連「サンヤク葛タイママヤイ苺」の「タイママヤイ」という部分に関しては、朴氏は(?)を附して飛ばしているが、快順僧都は「竹マヽヤイ」と「タイ」を竹だと捉えている。おそらく「竹」の tai に「飯」が繋がった複合語で、竹の実のことを指しているのではないか。その前後が「サンヤク＝山菜」「葛」「苺」と続いているのだから、ここも何か植物の食用の実である可能性が強く感じられるのだ¹⁰。その「タイママ」の前にある「サンヤク」を快順僧都は「芋」と訳している。おそらく、山からとれる野菜＝山芋という意味なの

だろう。これもほぼ両者一致した訳となっている。

そして両者が見解を異にしている部分はあとひとつ、子守歌の第二連「タアトさん」だろう。快順僧都は「タアトさん（タアトは月）」としているが、朴氏はこれを「月が上がった」としている。「タアト」が「月」であることは理解できるが、なぜ「タアトさん」が「月が上がった」となるのか、釈然としないし、またその説明もない。おそらくは快順僧都のいうとおり、「お月さん」といういみなのではないか。ついでにいうと、快順僧都は「明日も天気じゃタアトさん（タアトは月）」と書いていることからわかるように、当時の（明治中葉までの）隠岐五箇村では、「タアトさん」で「お月様」という意味があったのではないかと推察される。少なくとも快順僧都の解釈で、そのような括弧付きの解釈をしているところは「(牟羅では…)」というように他地域での歌詞を紹介するなど、事実関係の紹介に限定されている。そのような状況に照らしてみると、五箇村周辺では「タアトさん」で「お月様」という意味として充分に通じたが、他の地域では通じないだろうからあえて解説を加えたという雰囲気を感じられる。韓国に近い地域の島、たとえば対馬や壱岐では、友達のことを指す「方言」として「ちんぐ」という言葉が定着している。これが朝鮮語であるという認識が薄いような印象を受けたが、このような例として、隠岐五箇村に「タアトさん」という言葉が生きていたのではないかと推察される。先にも述べたように、五箇村は本土から日本海（鬱陵島）へと漁をしに行く際、最後の港でもあった。李氏朝鮮時代の鬱陵島は、海賊などをはびこらせないための政策として無人島となっていたが、実際には朝鮮半島から漁をしに行き来するひとは絶えなかったようだ。遠く漁に出るひとびとにとって、月はとても大切な目印であり、鬱陵島を通しての交流で「月」という言葉が受け入れられていった可能性は否定できない。

以上のように、「伊未自由来記」自体はおそらく偽書であろうが、この書物が「木の葉団子」という明治半ばまでつくられていた食べ物と関係のある「伝承歌謡」によって触発され、ねつ造された可能性がある。だとすれば、この「伝承歌謡」についてだけは、別個に考察する必要があるのだ。そして、いままで隠岐の僧侶、そして在野の研究者などにより、いちおうは解釈され

てきている。今回は、このような事実を紹介し、玄界灘にとらわれない海上での日韓交流の可能性をひらこうと、本論を記したのだ。

4. まとめ

2005年8月、筆者は隠岐へと向かった。その時は、「竹島問題」に関する調査、資料集めなどの目的だったのだが、偶然このような資料を発見した。実際、筆者は竹島＝独島が日韓のどちらの領土かということに、知的な関心は全くといっていいほどない。それよりも、軍事占領をしてまで竹島＝独島を韓国領だと主張し、それこそマスコミや国民の「独島観光」などといったかたちでの草の根のナショナリズムを刺激する一連の独島報道、あるいは「独島教育」とでもいうべきものから韓国ナショナリズムを読むことに、より大きな関心を持っている。それは日本の「竹島問題」とも共通するだろう。

かつて、筆者の所属していた大学院の先輩で、現在関西の大手私立大学に勤めている研究者がこういったことがある。「日本はナショナリズムなんといっても、そんなに大騒ぎしない。かりにワールドカップとかで韓国にライバル意識を燃やしたりしても、それはナショナリズムに火がつくのではなく、むしろガス抜きの意味を持っている」。

なんと浅薄なものの方だろうか。スポーツや領土問題など、生活と決して直結していないこれらの問題がキャンペーン化されることで、ナショナリズムというものはむしろ掘り起こされてしまうと考えられないのだろうか。国際スポーツの祭典があるたびに、日本のマスコミは「大和魂」「大和撫子」「日の丸飛行隊」などといった、単純な言葉を繰り返す。この繰り返される言葉こそが、草の根のナショナリズム、そして草の根の自民族中心主義を容易に解放してしまう。「竹島問題」にある「領土権」は、そのような言葉とは違うのであるが、しかし単純なナショナリズムを刺激してしまうという点では一致する。

対馬や壱岐とちがいが、隠岐はむしろ本土との近い関係を強調しており、韓国など外国との関係を強調するような議論は低調だった¹¹。しかし、隠岐にも朝鮮半島と近い関係があるはずだと祈りにも似た気持ちで資料を渉猟する

うちに、今回取り上げた「伝承歌謡」にあたったのである。内容的には「隠岐伝承歌謡紹介」の域を出ていないことは承知で、この文章を活字化し、日本海沿岸にある日朝の文化交流を考察する可能性を拡げること貢献しようと考えた。今後は隠岐の古文書などに見られる朝鮮との関係など、研究テーマがひろがればと思っている。

註

- 1 隠岐道後は町村合併により「隠岐の島町」となったため、行政単位としての五箇村はなくなったが、ここでは便宜上「五箇村」と表記する。
- 2 当時の日本では鬱陵島を「竹島」と呼び、現在「竹島」と呼び習わしている島のことを「松島」と呼んでいた。下條正男『竹島は日韓どちらの領土か』（文藝春秋、2004年）参照。
- 3 伊未自とは、五箇村の地域が天平四年隠岐国正税帳に「役道郡」とあることからきていると推定される。『五箇村誌』P265 参照。
- 4 『五箇村誌』（安部清編、島根県隠岐郡五箇村役場、1989年）、P265～266。
- 5 「伊未自由来記」は七つの章と追記からなっている。章立ては「一、木の葉比等」「二、阿麻」「三、山祇」「四、大人様」「五、美豆別之主命」「六、奈賀の命（中言神又那賀命等云う）」「七、十換彦命」である。「追記」には「木の葉比等」で紹介されている伝承歌謡の解釈を「周吉郡中村大字伊後清雲寺快順僧都」によって教示されたこと、その翻訳が載せられている。（後述）『五箇村誌』、P265～276。
- 6 毎日新聞社、1988年。
- 7 『五箇村誌』、P275～276。
- 8 『スサノオの来た道』、P171～173。
- 9 『スサノオの来た道』、P169～171。
- 10 開高健の「パニック」（1957年）では、竹の実がなる年は飢饉になるといふ言い伝えがある地方が舞台になっている。しかし、飢饉はこなかった。竹は決して毎年実を付けたりしないのだが、前回の飢饉の際にたまたま実がなり、その実を食べて農民が息をつないだということだったということがわかる。このように、竹の実は食用と考えられているわけだ。多少苦しいが、新解釈を与えるとしたらこう類推するしかない。
- 11 斗鬼正一氏の報告によると、「（隠岐は流配になった）天皇がいたのだから

都であり、隠岐は島でなく「小日本」だ、といった考えの老人も近年まで存在した」という。実際、離島という概念も1953年の離島振興法以降のものであったようだ。『離島「隠岐」の社会変動と文化—学際的研究』（小坂勝昭編、御茶の水書房、2002年）所収、「浦郷の離島認識—自然と文化の視点から」、P129～145。

(lee@pu-hiroshima.ac.jp)